校長室だより～燦燦～ №４４２

Fukushima50

2021.10.19

ずっと気になっていた。映画ができたことは知っていた。果たして観るべきなのだろうか。観たとして自分で消化しきれるだろうか。観なければならないという使命感と、観るのがこわいという感情の狭間で結論が出ないままだった。

この映画というのが「Fukushima50」である。２０１１年（平成２３年）３月１１日に発生した東日本大震災の際に、福島第一原子力発電所の業務に従事していた人員のうち、発電所の事故が発生した後も残った作業員を描いた作品である。作品の冒頭にこんな字幕が流れた。「これは事実に基づいた物語です」

事故発生後も約８００人の従業員が、復旧作業や応急処置にあたっていた。懸命の作業にもかかわらず、原子炉の水素爆発など度重なる原子炉爆発事故が発生し、危険回避のために約７５０名の人員は東京電力の指示によって避難した。だが、約５０人は現地にとどまり、被害を食い止めることに尽力した。

映画を観ていると、あの当時の記憶が鮮明に蘇ってきた。次から次へと、聞いたことのない用語が飛び交ったことが思い出される。放射能ではなく放射線、ミリシーベルト、建屋（たてや)、使用済み核燃料プール、そしてメルトダウンなどである。メルトダウンという言葉を耳にしたときは、どんなことなのかわからなかった。それでも、何か大変なことが起きるのだということは想像できた。その後、ニュースなどで解説を聞き、本当に大変なことなのだと知ることとなった。

最初に、この映画のタイトルを知ったときに、なぜ５０なのかと思ったことを覚えている。その後、被害を食い止めるためにとどまった５０人のことだと知った。またある疑問が湧いてきた。震災後１０年になるが、この５０という数字が表立って取り上げられたことがないのはなぜなのか。

「Fukushima50」の呼称を使ったのは、日本国外のメディアである。海外メディアは、現場に残った従業員たちの勇気を称え、彼らをヒーローと紹介し、「Fukushima50」の名が知れ渡った。だが、映画では、海外メディアが取り上げたようには描いてはいない。

吉田所長役の渡辺謙と伊崎当直長役の佐藤浩市が中心人物である。地元富岡町出身の伊崎当直長が、家族の待つ避難所にたどり着き、避難所にいる富岡町の住民の前で、「皆さんの富岡町を奪ってしまいました。申し訳ありません」と深々と頭を下げる場面がある。象徴的なシーンである。これが、この映画のスタンスであろう。

この作品は、門田隆将のノンフィクション『死の淵を見た男吉田昌郎と福島第一原発』が原作である。福島第一原子力発電所の事故を完全映画化したものである。震災後１０年が経過し、今の子どもたちは、震災のことがわからないということが話題になることがある。

震災を語り継ぐ手段は様々あろうが、この「Fukushima50」を観せるという方法もある。スクリーンには、まるで映画のような光景が繰り広げられる。だが、目の前で起きていることは作り物ではなく事実だと知ったとき、子どもたちは何を思うだろうか。まるで映画のようなというのは、起こりえないということである。それが、実際に起きてしまったのである。

字幕には、事実に基づく物語とあったが、決して物語ではない。事実であり、真実である。映画の中では、作業員をヒーローとしては描いてはいない。だが、映画のタイトルを「Fukushima50」とし、彼らの活躍を称え、誇りとして後世に残そうとしてくれたことがうれしい。